寺院

寺院の本質は、祇園精舎からずっと僧たちの修行の場であった。
仏教の発祥地インドでは仏像やそれを祀る堂はなく、
日本に移入された寺院の形式は中国で役所を元に形づくられた。
「寺」は役所を意味したという。

photo:Hiroshi Yoshida

column

建築家 角南 隆

【近代神社建築のパイオニア】

この項でたびたび登場する角南隆という建築家は、実は建築を生業にしている人にもあまり知られていません。大正から昭和にかけて角南が修復や設計した神社は膨大な数にのぼり、また伊勢神宮の式年遷宮に3度も関わった、近代神社建築のパイオニアです。

明治20年に岡山に生まれた角南は、東京帝国大学を卒業後、明治神宮造営局に入局します。明治神宮は、明治天皇を祀るために建立された神社で、その設計は建築史家伊東忠太らが担当していました。角南は伊東のもとで造営事業に参加する中で、古い社殿形式の問題点に気づきます。そのひとつが別々に分かれた社殿の配置でした。

角南の同世代には建築家アントニン・レーモンドらがおり、機能に重きをおいたモダニズム建築も登場していました。内務省の技師となった角南は、伝統的な形式を継承しつつ、機能的な新しい社殿を探求し、全体をひとつなぎにまとめる形式を創りあげました。

昭和30年に戦災復興で再建された明治神宮の社殿は、角南の畢生の作品です。その同時期には熱田神宮や真清田神社の再建にも携わり、愛知へも頻繁に訪れていました。角南はその後、日本建築工芸株式会社を設立し、神社建築に計り知れない業績を残して、昭和55年に93歳で亡くなりました。

重要文化財の明治神宮外拝殿

登録／2005年7月
登録基準／造形の規範となっているもの（本堂・随求堂・山門・弁天堂）

Zyakkôin

本堂と随求堂が並ぶ風景。夕日がお堂を赤く照らす

寂光院

絶景に開かれた、奈良時代創建の学山

絶景のお堂

古来より、密教の寺院は修行の場として峻厳な山奥に開かれ、地形に沿って建てられたお堂は、自然と溶け合った素晴らしい風景を創り出してきました。

寂光院は、そんな絶景の広がる険しい岩山に開かれた、愛知でも指折りの名刹です。

継鹿尾山八葉蓮台寺寂光院略記

継鹿尾山の開山は654年といわれ、唐に渡った僧道昭が創建し、また日本武尊に繋がる熱田神宮との奇縁で白鳥山神宮寺が建立されたと伝わっています。険しい岩山に寺が開かれたのは、このあたりが東山道の要所だったことに関係しています。

その後、奈良時代に寺号を八葉蓮台寺に改称し、密教の学山として発展すると、多くの子院や塔頭が建てられ、たくさんの学僧が訪れる大寺院になりました。ところが、本堂が火災で焼失すると、子院は散り散りになり、寺は衰退していきました。

1565年、美濃攻めで犬山を攻略していた織田信長は、荒廃した寺の姿を惜しみ、継鹿尾山に留まっていた子院の寂光院に寺領や山林を寄進し、復興を命じました。その時の信長の判物は、今も寺宝として残されています。

随求堂内観。夕日のさす堂内は筆舌に尽くしがたい

奇跡の空間

境内にある現在の諸堂は、近世以後に建てられたものです。中でも薬医門や山上の本堂、随求堂、弁天堂、馬鳴堂は、尾張の名工竹中家が代々手掛けた見ごたえのある建築です。

山上の見晴らしの良い場所にたつ本堂は、手前の空間を吹き放ちにした気持ちの良いお堂で、高欄のない広縁がいっそう開放的な気分を醸しています。また、向拝の虹梁から突き出された獅子や獏の彫刻も、彫りが深くシャープで凛々しいです。

一方、堂内は千手観音菩薩が鎮座する宮殿が間近に迫り、美しく飾られた密度の高い空間になっています。

その本堂と渡廊下でつながる随求堂もまた、魅力のあるお堂です。かつては籠堂と呼ばれ、参拝者たちが泊まるためのお堂でした。角柱で高く持ち上げられた堂内にはたくさんの観音像が祀られ、また開山道昭、中興慶源らの彩色された塑像が脇に鎮座し、低い天井の格間にはさまざまな絵がびっしりと嵌められています。

夕暮れ時に南側の蔀を跳ね上げると、夕日がダイレクトにさし込み、お堂を赤く染めあげます。その時、堂内は山頂の絶景と荘厳が混じり合って、奇跡のような空間に包まれます。

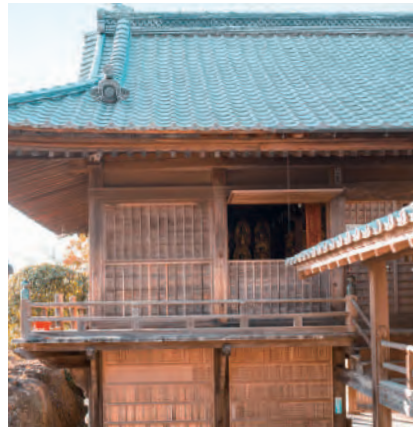
尾張のもみじでら

寂光院は紅葉の美しいお寺としても有名です。しかし、少し前までは現在のような観光名所ではなく、伊勢湾台風で甚大な被害を受けるなど、幾度も危機に瀕してきたといいます。それを救ったのは、歴代の住職たちでした。

古代から続く名刹は、お寺を守る人々によって次の時代へと手渡されてきたのです。

織田信長も眺めた絶景

本堂／1879年 随求堂／1805年 薬医門／1836年
木造平屋建て
棟梁／竹中和泉正敏九世、竹中藤五郎十二世
犬山市継鹿尾山
https://www.jakkoin.com


随求堂外観。右手に見えるのが本堂と繋ぐ渡廊下

登録／2005年7月
登録基準／造形の規範となっているもの（本堂・本玄関及び書院・不老閣・茶室・鐘楼・山門・庫裏）

Syunkôin

本堂の眺め。竹林に囲われた路地の先に広がる幻想的な風景

春江院

丘陵地に囲われた、さまざまな和風建築のあるお寺

酒蔵のある町並みの里山の寺

名古屋の南に位置する大高町は丘陵の多い土地で、常滑街道沿いには江戸時代から明治にかけて栄えた酒蔵がいくつも残っています。

その町並みの奥の丘陵へ進むと、住宅街の中に竹林に囲まれた春江院の山門があり、風にざわめく木々が深山の風情を漂わせています。

山門をくぐり路地を抜けると、突然視界が開け、正面には大きな屋根の立派な本堂がたっています。広々とした境内には鐘楼や庫裏があり、周りを林が取り囲むことで、まるで昔話の世界に足を踏み入れたような印象を受けます。

堂内の眺め。虹梁を抜いた広々とした空間

尾張の名工が手掛けた本堂

多宝如来を本尊とする大高山春江院は、大高城領主水野大膳が父の位牌を祀るために建てた小さなお堂が始まりと言われています。境内が充実していったのは江戸末期の頃からで、酒蔵をはじめとした檀家たちの寄進により整えられました。

曹洞宗に属する春江院は、本堂にもその流れを見ることができます。もとは禅宗の住職の住まいだった方丈を、修行のできるお堂に流用した形式です。

本堂の棟梁には尾張の名工竹中家の九、十世が就き、堂内では桁行の虹梁を抜いて、開放的な空間を創り出しています。大きなひとつながりの空間は修行や法要などに応じて区分けされますが、教義によって明確に隔てられるのも禅宗の特徴です。

内庭の茶室。数寄屋の向こうに竹林が見える

これら宗派による教義の違いや作法などに習熟し、その上で創意を振るう腕前が、名工たる所以といえます。一方で、後年に補強のため小壁に筋交いが入れられており、構造力学が未発達だった頃の苦心の跡を見る思いがします。

和風建築のテーマパーク

本堂に隣接した玄関の先には、有松の名家から譲り受けたという書院があります。狩野永秀の襖絵をはじめ瀟洒な設えが室内を飾り、大きな障子を開け放つと、竹林を借景とした美しい庭を眺めることができます。また、庭の風景に彩りを与えている数寄屋や茶室なども見どころです。

もうひとつ紹介したいのが、大きなクドのある庫裏です。クドとは煮炊きをする土間をいい、火を扱う場所であるため吹き抜けの大きな空間となっています。そこに架かる弧を描いた大梁が大黒柱に支えられる姿はとてもダイナミックで、見ごたえがあります。

宅地開発の波

春江院の周辺は、近年劇的な変化を遂げています。高架の23号線が近郊を走り、昭和から平成にかけて進められた宅地開発が丘の上にまで迫っています。

そこから境内を見下ろすと、大小の屋根が連なる風景が和風建築を集めた箱庭のように見えます。丘陵に囲われた里山の寺は、ぎりぎりの線で魅力的な雰囲気を保っています。

庫裏のクド。松の大梁は境内に生えていたもの

本堂・山門／1830年
書院／明治12年移築 庫裏／昭和8年
木造平屋建て 庫裏／木造2階建て
棟梁（本堂）／竹中和泉正敏九世
名古屋市緑区大高町字西向山5

登録／2015年11月
登録基準／国土の歴史的景観に寄与しているもの（本堂・七面堂・山門・玄関）

Zenryûzi

本堂を斜めから見る。高台にあるため屋根が空に映える

善立寺

不思議な意匠に彩られた、味わい深いお寺

様式外の美

日本建築の歴史を語るとき、新しい技術の導入や様式の変化で時代を分け、画期となった建物を中心にその変遷を紹介することがほとんどです。一方で、それら様式や宗派の形式などに囚われず、色々なものを寄せ集めて、柔軟な発想で建てられた建物もたくさんあります。

善立寺は、そんなさまざまな形が入り混じり、不思議な魅力に満ちた、味わい深いお寺です。

本堂内観。七面堂と繋がり、奥行きが深い

岡崎と善立寺

大光山善立寺は、曼荼羅を本尊に祀る日蓮宗身延山久遠寺の直末寺です。創建は15世紀の中頃で、かつては碧海郡安城にありましたが、徳川家康の祖父松平清康と共に岡崎に移り、江戸時代になって城下町造営のため、現在地へと移りました。その際に本堂を解体して移築したと考えられ、柱にはいかだに組んで川で運ばれた時の跡が残っています。

古くから人の往来していた岡崎では、鎌倉時代以降に多くの寺院が建立されました。足利幕府の庇護を受けた滝山寺をはじめ、松平家の菩提寺の大樹寺などの名刹は全国的にも知られています。

善立寺はその中でも、松平家に仕える武家の祈祷寺として敬われてきました。本堂左脇陣の格天井に嵌められた家紋は、大檀家の武将たちのもので、彼らから篤い崇敬を集めていたようすが窺えます。

左脇陣の家紋が描かれた格天井

入り混じる空間

かつて岡崎城の高麗門だった山門をくぐると、本堂の前の2本の松が出迎えてくれます。瓦葺きの屋根が迫る本堂は、七面天女を祀る七面堂や勅使玄関と連結され、手前には短い向拝が付いています。よく見ると本堂は左右で柱間が異なり、微妙に非対称になっていて、このお堂の不思議な雰囲気が滲み出ています。

堂内に入ると、その雰囲気はいっそう強まります。正面に見える内陣には、彩色の施された丸柱と梁に囲われた禅宗様の須弥壇が置かれ、天井からは金色の荘厳に混じって提灯がぶら下がっています。また隣接する七面堂とは内部で繋がり、横長に一体となった空間は予期せぬ広がりを感じさせます。

外陣に腰を下ろすと、模様の異なる美しい格天井が内陣と両脇陣に3つ浮かび、さまざまな装飾が混在した堂内は、さながら曼荼羅の世界のように感じられます。

ちなみに、右脇陣の極彩色の竹網代組みの格天井については類例がなく、何を参照してデザインされたのか分かっていません。

当たり前のお寺の風景

おそらく近世以前は、善立寺のように様式や形式に縛られず、身近にあった良いものを取り入れて境内を整備していった寺院が多かったのだろうと思います。

ただ、そんなお堂の中に由来のわからない意匠が忍び込んだとき、その彩りが建物に謎めいた魅力を与えてくれます。

右脇陣の竹網代組の格天井

本堂／1532年、1647年移築
七面堂／江戸後期　山門／明治前期移築
［設計］不明
岡崎市祐金町1丁目31

奉安塔全景。白い花崗岩に金の装飾がきらめく。欄干の装飾が基壇の蕾から上に向かって開いている

特集2

日泰寺奉安塔

日本で唯一の全仏教寺院

名古屋には日本で唯一のお寺があります。それが覚王山日泰寺です。本物の仏舎利を祀り、どの宗派にも属さない、極めて異例のお寺です。ちなみに覚王とはブッダのことで、日泰とは日本とタイの結びつきでできたことをあらわしています。

創建されたのは明治37年。その少し前に、北インドのブッダの生まれたルンビニーの近くで、イギリスの発掘調査員が丘の下に埋もれた古墳を発見します。その中からちいさな石の壺の中に人骨を見つけ、それが本物の仏舎利（ブッダの遺骨）であることが確認されました。

県指定文化財の通天門。礼拝殿とも以前は登録文化財

ただ当時のインドは仏教国ではなかったため、仏舎利はタイに渡され、その一部が日本にも贈られることになりました。

伊東忠太のストゥーパ

仏舎利をおさめる奉安塔の設計は、建築史家伊東忠太に託されました。伊東は、明治後期に中国からヨーロッパにかけて、ユーラシア大陸を横断する大調査旅行を敢行し、アジアの建築にも深く通じていました。

デザインの規範にしたのは、インドの仏舎利をおさめるストゥーパという記念碑で、特にインド仏教美術発祥の地ガンダーラのものに求めたといいます。

礼拝殿。通天門ともに伊藤平左衛門十世の作

奉安塔のストゥーパは釣り鐘に似た形状で、高欄付きの基壇と八角形の胴部の上に乗っています。頂部には金色の宝珠が付けられ、白い花崗岩のストゥーパの上に黄金が輝く姿は、少し離れた場所からでもよく目立ちます。基壇の周りには棕櫚などの木々が植わり、その隙間から奉安塔を見上げると、まるで密林の中で遺跡を見つけたような感動を覚えます。

基壇から木々越しに奉安塔を見る

日泰寺は戦後に境内の整備が進み、現在の参道はおしゃれな店があつまる名古屋で有数の観光スポットになっています。その深奥には日本で唯一のストゥーパが、悠久の時を刻んでいます。

※現在は非公開となっています。

登録／2017年5月
登録基準／造形の規範となっているもの（本堂・書院）
国土の歴史的景観に寄与しているもの（庫裏・鐘楼・山門及び脇塀・梵音寺本堂）

Renkôzi

本堂の内観。外陣の障子から入る光が拡散されて堂内を照らす

蓮教寺（れんきょうじ）

『尾張名所図会』の姿を残す、黄金の本堂

光り輝く蓮教寺

黄昏時のお寺は、いわく言い難い郷愁を誘います。

法雲山蓮教寺は、名古屋東部に広がる牧野池近くの住宅地の丘にあり、夕暮れになると境内は茜色に染まります。その時、本堂の中は夕日と荘厳（しょうごん）が混じり合って黄金に輝き、極楽浄土を思わせる空間が現れます。

地元ではその美しさがわらべ唄となり「ひかりかがやくれんきょうじ」と歌われました。

本堂の外観。シンプルな構成が美しい

牧野池と蓮教寺

蓮教寺の創建は10世紀に遡ります。創建当時は天台宗でしたが、13世紀ごろに兵火に遭い焼亡したといいます。その後、浄土真宗に改宗し、名称を法雲山蓮教寺と改めて、18世紀初頭に現在地へ移りました。

また、かつてこの辺りはやせた土地で、蓮教寺の堂宇も藁葺きだったと伝わっています。それが江戸時代になって灌漑用の牧野池が造られると、田んぼが開かれて米のできる土地になり、池には渡り鳥が飛来して尾張徳川家の御鷹狩場ともなりました。

松平家と婚姻関係にあった蓮教寺もこの頃から発展し、尾張徳川家との繋がりも得ました。現存する書院は、貴賓を迎える上段の間を設け、内装も上質な作りとなっています。

正面に大きな床を構える書院

『尾張名所図会』の姿を残す境内

蓮教寺の魅力のひとつが、江戸末期に描かれた『尾張名所図会』の境内の姿をほぼそのまま残していることです。図会には、牧野池のすぐ近くで、のどかに広がる田んぼから丘を登った先に山門を開く蓮教寺の姿が描かれています。

重厚な瓦屋根の山門には獏や獅子の彫刻が付き、柱間上部には透かし彫りの装飾が施されています。ただ、門をくぐると、正面に見える本堂の姿に少し拍子抜けするかもしれません。門の立派さに比べると、少しこざっぱりと見えるからです。装飾や彫刻はほとんどなく、障子と袖壁の白色がより簡素な印象を与えます。

本堂に足を踏み入れると、畳の敷かれた外陣（げじん）のすぐ目の前に内陣が迫り、金箔の押された柱や梁、欄間、それに極彩色の組物があります。南西を向いた本堂には夕日が差し込み、外陣の畳がそれをバウンスさせ、内陣の装飾を輝かす間接照明のような役割を果たします。この工夫が黄金の時間を演出しています。

本堂を手掛けたのは尾張の名工伊藤平左衛門五世で、当時の棟梁は設計から施工管理まで行う優れた建築家でした。蓮教寺本堂は、名工が手掛けた現存する古い遺構のひとつです。

黄昏のノスタルジア

田んぼの広がるのどかな風景も今では住宅地となり、蓮教寺や牧野池の歴史を知る近隣住民も少なくなりました。ただ、境内から眺める黄昏に沈む街並みは、今も変わらず心を揺さぶります。

丘を登った先にある重厚な山門

本堂／1758年 書院・山門／1812年
木造平屋建て
棟梁（本堂）／伊藤平左衛門五世
名古屋市名東区高針四丁目864
http://www.renkyouji.com

photo：Hitoshi Kumamoto

本堂正面。軒下の空間が広々と透けていてとても気持ちいい

報光寺（ほうこうじ）

名工伊藤平左衛門が手掛けた、大屋根の浮かび上がるお堂

浮き上がる大屋根

日本建築の魅力のひとつに、大きな屋根と深い軒下空間があります。報光寺の本堂は、その空間を巧みに活用した豪壮なお堂です。

高雲山報光寺は、名鉄犬山線の江南駅から北西へ300m程の細い街道に面して境内を構えています。かつてこのあたりは、いくつもの街道が交差する賑やかな町場でした。

創建は852年、天台宗円仁（えんにん）が開基したと伝えられています。その後廃寺となりますが、1232年に親鸞聖人がこの地を訪れ浄土真宗の念仏道場として使用し、高弟の性信房（しょうしんぼう）が受け継いで再建されました。ちなみに報光寺の山号と名称は、性信房の開山した高龍山報恩寺に基づいて改称されたものです。

山門。2階建ての楼門は市指定文化財

浄土真宗のお堂

報光寺を訪れてまず目に飛び込んでくるのが、立派な楼門のある山門です。楼門とは2階のある門のことで、両脇には山廊が付いています。この楼門は小牧の正眼寺から譲り受けたもので、明治9年に移築されました。

本堂内観。虹梁の上にのる組物に注目

門をくぐると、大きな屋根の本堂が迫ってきます。屋根の軒下が広々と吹き放たれていて、まるで屋根が浮き上がっているかのようです。浄土真宗では聞法（もんぼう）という仏法を聞く行為を大切にしており、法話が行われる日になると多くの門徒が詰めかけます。そのため、大きな本堂が必要となり、堂内から溢れた人々のために軒下空間が広げられたといいます。広縁と落縁の幅は4・4m、軒先まで含めると優に6mを超える軒下空間です。

堂内は浄土真宗の平面形式が踏襲され、内陣や余間の壁面、欄間などが金箔で美しく飾られています。興味深いのが、壁側と内側で柱の数が違うことです。これは広い空間を確保するための工夫で、減らした柱の負担は虹梁（こうりょう）の上に載る組物で補っています。また、壁面を強固にすることで、大屋根の軒先を支える構造的な工夫もなされています。

ツウの見方としては、堂内から広縁に至るまで丸柱で構成されていることも、由緒あるお寺に許された特徴です。

尾張の名工伊藤平左衛門

本堂の大胆な構成は、尾張の名工伊藤平左衛門によるものと考えられています。実は報光寺の棟梁は長らく不明とされていました。それが近年になって、虹梁の絵様（模様）や伊藤家に残された文書などから推定されました。

報光寺本堂の吹き放たれた軒下空間と大屋根の浮かぶような造形美は、そんな発想と経験に裏打ちされた名工の建築技術で形づくられているのです。

広縁と落縁。その際に立つ丸柱

1855年
木造平屋建て
［設計］伊藤平左衛門七世、八世
江南市古知野町本郷114

本堂を見る。苔、紅葉、本堂のコントラストがなんとも美しい

崇覚寺（そうがくじ）

まちの喧騒に紛れ込んだ、美しい路地のあるお寺

名古屋の小京都

崇覚寺は、名古屋の都心に美しい路地を開くお寺です。晩秋の頃は、苔庭に色とりどりの紅葉が映え、静かに佇むお堂の中では荘厳（しょうごん）がきらりと輝く、まるで京都の名刹のような風情です。

すぐ側には東本願寺名古屋別院の境内が広がり、周囲を22号線と大津通、高架の名古屋高速が走る騒がしい一角に、崇覚寺の境内があります。

堂内の荘厳。庭にいても輝きを感じる

崇覚寺と名古屋別院

崇覚寺は山号を長嶋山（ちょうとうざん）といい、元は三重県桑名市の長島に建立されました。創立は水谷右衛門重直と伝わり、石山合戦で戦死した父安養坊と同じく東本願寺の教如（きょうにょ）上人に弟子入りして、同地に寺を開いたといいます。

江戸時代になると、名古屋の城下町整備にあわせて現在の西区堀詰辺りに移転し、東本願寺名古屋別院の建立に尽力。1713年、名古屋別院の完成に伴い現在地に移転しました。移転に際して、本堂は名古屋別院の余材で造られたとも伝わっています。

西門から東門へ通り抜けの路地をみる

現在の本堂は、江戸末期の1866年に再建されたもので、尾張の名工伊藤平左衛門八世が手掛けました。『尾張名所図会』などに描かれた境内のようすから、東西に細長い敷地の両側に門を開き、北側に本堂や庫裏（くり）を寄せて、南側を庭にしていたことがわかります。これは現在の配置とほぼ変わっていません。

本堂の正面は庭を向き、向拝（ごはい）を路地へと伸ばしています。堂内は浄土真宗の平面形式にならい、内陣と外陣（げじん）の間には矢来内（やらいうち）があり、内陣の両脇には余間を備えています。内陣の須弥壇（しゅみだん）や余間の仏壇、欄間には金箔が押され、美しく飾られています。

興味深いのは、この本堂の平面が微妙に左右対称ではないこと。外陣と矢来内の畳のズレに気が付かなければ見逃してしまうほどの微妙な差です。理由はわかりませんが、このズレのために構造が複雑になっており、そこに何らかの意図があったことを伺わせます。

路地の美を守るもの

江戸時代が終わり、明治の世になってからも東本願寺の勢いは衰えることはなく、縁日には名古屋別院に多くの人が詰めかけました。現在の本堂は戦後に再建されたものですが、かつての名古屋別院は伊藤平左衛門七世が手掛けた巨大な木造のお堂でした。戦災でほとんどの堂宇が失われましたが、東門だけは焼け残り、往時の姿を今に伝えています。

早朝の崇覚寺の路地は格別です。ひらかれた門から風が抜け、わずかに差し込む木漏れ日が湿った苔を照らす光景は、思わずため息が漏れます。この美しい路地は、住職が毎日丹精込めて掃き清めることで保たれ続けています。

登録文化財の名古屋別院東門も伊藤平左衛門八世の作

1866年
木造平屋建て
［設計］伊藤平左衛門八世
名古屋市中区橘2-6-37

徳興殿の内観。木造とは思えないスケールの大きな空間で、小屋組みはトラスと思われる

建中寺徳興殿

尾張徳川家の菩提寺に移された、旧商工会議所の事務所

尾張徳川家の菩提寺

徳興山建中寺は、国道19号線から少し入った落ち着いた街中にあります。近くには筒井小学校や東海中学・高校があり、総門前に連なる筒井町商店街は、今も下町の情緒を色濃く残しています。

建中寺は、1651年に尾張藩主二代目の徳川光友が父義直を弔うために創建した尾張徳川家の菩提寺です。広い境内には霊廟をはじめ本堂や書院など多くの堂宇がありましたが、1785年の火災で殆どの建物を焼失しました。総門や山門は焼け残りましたが、本堂や霊廟はその後に再建されたものです。

徳興殿外観。敷地の奥まった場所にたつ

霊廟は御霊屋といい、明治5年に四宇の霊廟が藩祖義直の御霊屋に合祀されて本堂の奥に祀られています。御霊屋は、本殿と拝殿を合の間で繋ぐ構成で、柱や梁、組物まで極彩色に塗られています。普段は大きな本堂の影に隠れ、また退色防止の覆屋が付いているため、その姿を見ることはできません。

県指定文化財の御霊屋と唐門

徳興殿

ところで建中寺の境内には、お堂の他に徳興殿という木造の大きな建物があります。名古屋商工会議所の事務所として建てられ、昭和9年に建中寺に移築されました。また、建設当初に工事を担当した清水満之助は清水建設の前身となる清水店の三代目で、他の候補者には伊藤平左衛門も挙がっていました。

徳興殿の移築に際しては、当時の住職椎尾弁匡が関与したと考えられています。椎尾は僧侶だけでなく仏教学者の肩書も持ち、参議院議員も務めた人物で、名古屋の財界人とも繋がりが深かったといいます。

徳興殿の魅力は、なんといっても2階の大広間にあります。幅10m、奥行き20mの125畳におよぶ無柱空間は、木造とは思えないスケール感です。格天井の幾何学的な構成も、どこまでも広がるような印象を与えます。もうひとつ空間を彩るエッセンスが、両脇に控える廊下から取り込まれた光です。この光が障子を背面から照らし、大広間へ拡散されて、室内に不思議な浮遊感を与えています。

また、大広間に目を奪われがちになりますが、2階へ至る階段の手すりなどの控えめな装飾も隠れた見どころです。

みんなのお寺

建中寺は戦後名古屋の復興計画のおりに、境内地の多くが割譲されました。広大な敷地は5分の1になったといいます。また総門から山門にいたる参道は公園となり、建中寺とは車道で切断されて、往時の雰囲気はかなり薄れてしまいました。

ですが、公園には近隣の学生や子どもたちがたくさん集まり、元気に走り回る声がいつも響いています。尾張徳川家の菩提寺は、今ではすっかり地域に馴染んだみんなのお寺になっています。

市指定文化財の建中寺本堂。大きな屋根が青空に映える

1896年（明治29年）・1934年（昭和9年）移築
木造2階建て
［設計］不明［工事］清水満之助
名古屋市東区筒井1-703-1
http://www.kenchuji.com